

## 【論文】

# 根来寺門前町の町並み及び町家 —西坂本の近代町家の特徴について—

## Modern Machiya and the Townscape near the Gate of Negoro Temple in West Sakamoto

千森 睦子 堤 涼子<sup>\*1</sup>

※1 多摩美術大学

西坂本はかつて根来寺の門前町として栄えた地である。町並みを構成している家屋には長屋門や蔵も残されているが、通りに主屋が面する町家が主である。伝統的な町家の中に平入り形式、厨子二階建であるが、桟瓦葺き屋根で2階外壁が真壁で中央に貫が通る町家が数軒みられる。近代以降に普及した建築様式、外観意匠と考えられる。一方、これらの町家の庭園においては擬木の多用がみられ、近代庭園が普及する同時期に新しい造園資材を取り入れたことがわかる。そのために、近代化が建物と庭園の両方で進んでいったことが把握される。

キーワード：根来寺、門前町、西坂本、町並み、近代町家

### 1 はじめに

西坂本<sup>1)</sup>は岩出市の北部に位置し、かつては根来寺の門前町として栄えた地である。根来寺の門前町は、粉河方面からの参道に沿った東坂本と、和歌山方面からの参道に沿った西坂本の2つに分かれて栄えていた。

しかし、現在、東坂本には門前町の面影は残されていない。一方、西坂本の本通り沿いには、新しい建物に混ざり、市指定文化財の長屋門を構える金田家住宅などの古民家が残され、歴史的な面影が垣間見られる<sup>2)</sup>。

そこで、岩出市は文化遺産を活用した地域活性化推進事業の一環として、「岩出市文化遺産記録作成、調査研究事業」<sup>3)</sup>に取り組むこととなった。平成27年度と平成28年度の2か年にわたり実施したが、平成28年度に西坂本の町並み及び町家の調査研究が実施された。

筆者はこれらの調査の主担当者として携わったが、本稿はそれらの調査結果から考察を試みるものである。

### 2 研究方法

対象地域の西坂本は、国宝の大塔を有する根来寺の西南に位置し、町並みの東側を根来川が流下する。

調査研究は、まず町並みの外観調査を行い、つぎに、伝統的な家屋形式をもつ町家を抽出して調査を実施した。調査は観察調査、写真撮影、実測調査に加えて、聞き取り調査を行った。収集した資料に文献資料を含めて考察した。実測調査は民家調査の一般的な直接距離測量を用いて、図面を作図した。庭園を含む配置図は作図にあたり航空図も参考にした。本来、庭園実測には距離測量と角測量を同時にうトータルステーションを用いる方法や3次元レーザー測量などを行うが、建築主体の調査のために庭園も直接距離測量によった。そのため、配置図の庭園部分は概ねの位置を表すものとする<sup>4)</sup>。

調査年月は、平成28年5月、9月、11月、同29年2月である。

### 3 結果および考察

#### 3.1 西坂本町並み

##### 3.1.1 西坂本町並みの歴史

西坂本は、根来寺の参詣客などを対象とした飲食店や旅籠が立ち並んでいた地域であり、根来寺が最も繁栄していた中世に門前町も栄えていたと考えられるが、当時の資料は残されていない。

歴史的な町並みを知ることのできる史料として、高市志友編（1812）の『紀伊国名所図会』がある。同書内に西坂本の近世末期の様子を描いた挿絵がある（図1）。

挿絵を見ると、門前町本通りに面して、両側に町家が建ち並び、町並みが形成されている。町家の建築的な描写も比較的精巧である。茶店と思われる建物は、本瓦葺きの平入り形式で、虫籠窓をもつ厨子二階屋である。店の間では飲食をしている客がいる。また、その隣や向かいには草葺き屋根の町家もみられる。隣家は綿から糸を紡いでいる職人宅の様にも思われる。往来する旅人や町人の姿も描かれ、西坂本が門前町として賑わっていただけでなく、製糸業にも携わっていた様子が窺える。

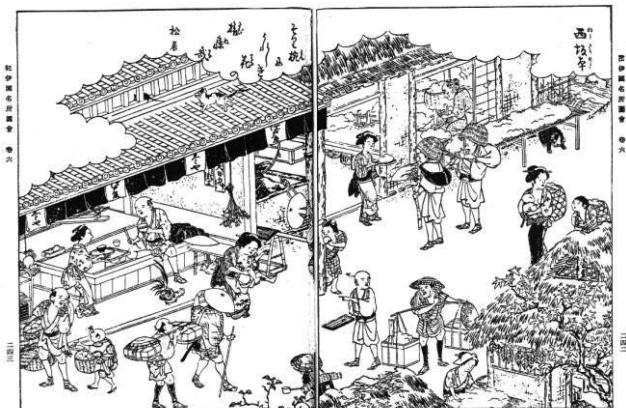


図1 西坂本『紀伊国名所図会』

##### 3.1.2 西坂本町並みの特徴

###### 3.1.2.1 長屋門

現在の町並みに、一際風格のある長屋門が残されている。一つ目は、近世の藩政時代には地主であった、金田家の長屋門である（図2、3）。岩出町誌（1976）によると建築年代は、寛政9（1797）年と推測されている。桁行き約8間、梁間約1間半の規模である。屋根は本瓦葺きで、右端は入母

屋形式で、左端には蔵が接続している。正面外壁は下部が海鼠壁で、上部は漆喰仕上げである。昭和42年1月に岩出町（現岩出市）の文化財に指定された貴重な遺構である。



図2 金田家住宅長屋門北端



図3 金田家住宅長屋門南端

二つ目が、金田家より北側に位置する、平野家本家の長屋門である。乳金物が付く両開きの門扉をもち、屋根は桟瓦葺きで、入母屋形式である。正面外壁は下部が軒子下見板張りで、上部は漆喰仕上げである（図4）。

さらに、町並みには別棟で二階屋を併設した、新しい様式の長屋門もみられる（図5）。



図4 平野家本家長屋門



図5 二階屋を併設する長屋門

### 3.1.2.2 町家の主屋外観

町並みには僅かに蔵も建ち並んでいるが（図6）、町並みを主に形成しているのは、主屋が通りに面する町家である。その外観の形式や材料を検討する。

構造は大部分が木造であり、鉄骨造や鉄筋コンクリート造は数軒のみであり、町並みの北端に1軒と中程から南に数軒分布している（図12）。

家構では平屋（図7）は少なく、大部分が二階屋である（図13）。中でも2階の軒高や天井高が低い、厨子二階屋は町並北側にまとまって分布している（図8-11）。



図6 通り沿いの蔵



図7 格子、煙出しをもつ平屋



図8 太い縦子格子・虫籠窓をもつ伝統的な町家



図9 栈瓦葺き、真壁形式の厨子二階屋



図10 大型の平入り厨子二階屋



図11 妻入り厨子二階屋

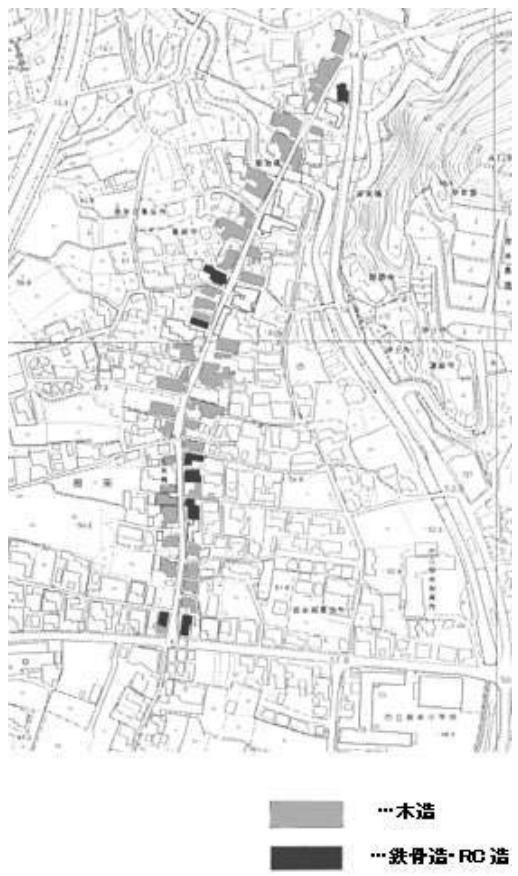


図12 構造

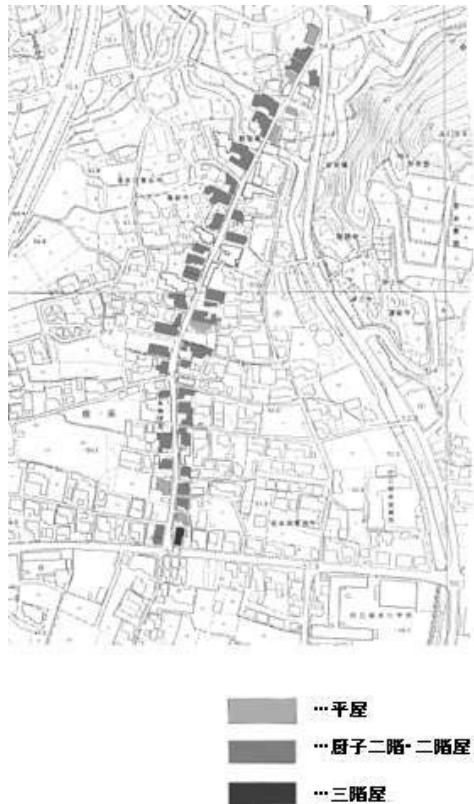


図13 階数

屋根材料は、本瓦は1軒と少なく、大部分が桟瓦である。また、色桟瓦やガルバリウム鋼板などの新建材も僅かではあるがみられる。庇材料も大部分が桟瓦である。色桟瓦は2軒あるが、本瓦はみられない。

持ち送りのある家屋は4軒のみで、町並みの中心からやや北側に集中している。木製が2軒と鉄製が2軒である。

戸口は平側にある平入り形式が大部分である。妻入り形式は、町並み中程に虫籠窓をもつ近世の町家が1軒あるが、それ以外は南側にややまとまっている（図14）。

これらの町並み調査結果から考察すると、『紀伊国名所図会』に描かれていた、本瓦葺き屋根の厨子二階屋で、2階外壁が大壁に虫籠窓をもつ平入り形式の近世の面影を残す町家は1軒のみと少ないことがわかる（図8）。

他方、注目すべきは、桟瓦葺き屋根の厨子二階屋で、2階外壁が真壁で貫が通る平入り形式の家屋である。この形式の家屋を本稿では町家M型家屋と名付けた。町家M型家屋は通り沿いに5軒あり（図14-19、21）、いずれも近代以降の建物である。その内町並み北部の観音橋袂にある平野家住宅（図19）は明治26年、3軒南の寺本家住宅は昭和初期の普請であり（図20-26）、いずれも大型で持ち送りをもち、町並み景観として貴重な家構と考えられる。

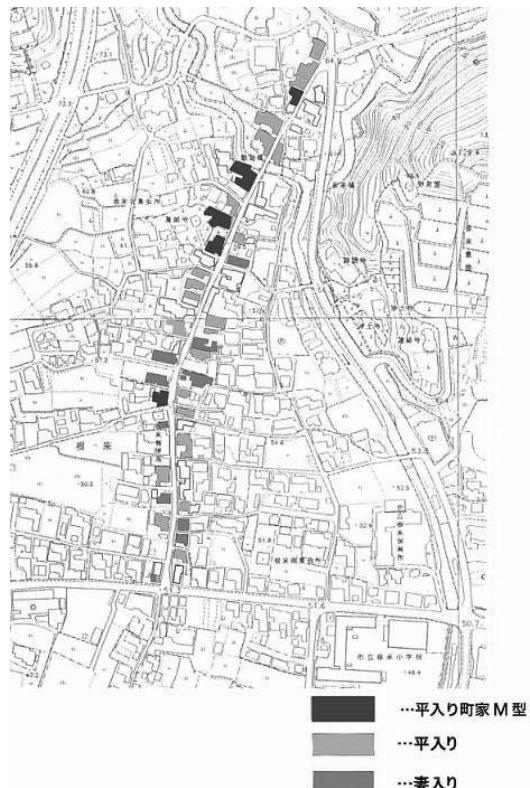


図14 入口方向と町家M型家屋



図15 町家M型家屋 その1



図16 町家M型家屋 その2



図17 町家M型家屋 その3



図18 町家M型家屋 その4

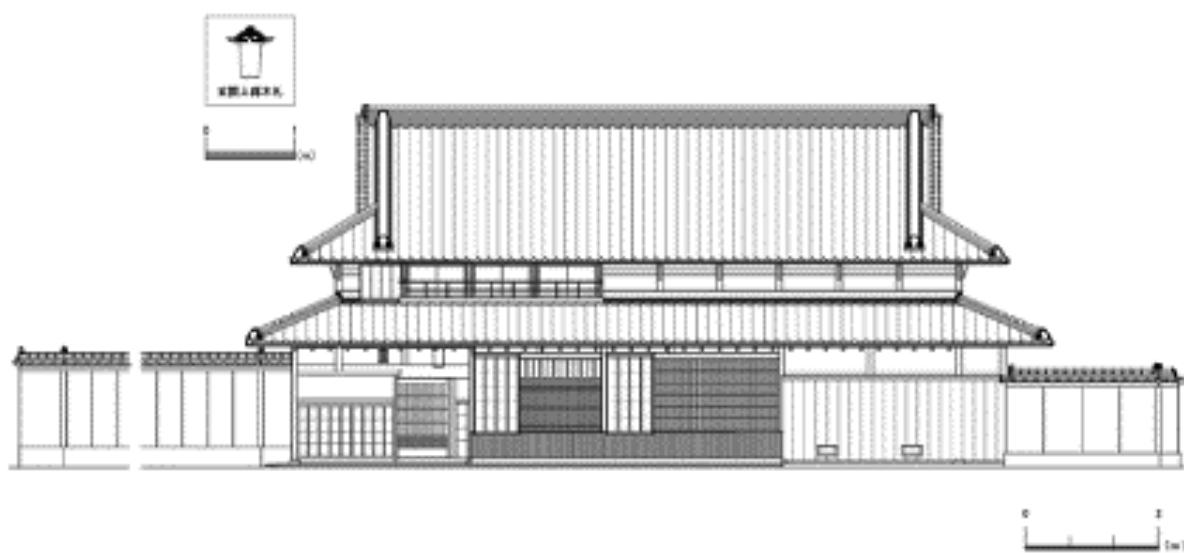


図19 町家M型家屋 その5 (平野家住宅) 立面図

### 3.2 西坂本の近代町家の特性

これらの特徴をもつ町家として、町並み北部の西側に位置する寺本家住宅を取り上げ考察する。

家伝によると寺本家は農地改革以前は周辺地主であり、主屋と蔵は地主であった昭和初期の建築である。

#### 3.2.1 屋敷構成

寺本家住宅の敷地は、南北に長い矩形であるが、蔵が西北に張り出して設けられている(図 20)。

家屋が通りに面する箇所以外の敷地外周は築地塀やコンクリートブロック塀で囲われ、庭園に通じる北東の角には門を構える。

敷地内には、主屋(図 21)と離れ、主屋に付属する衛生空間、便所舎、蔵、池庭が配されている。

離れは、物置であった場所に隠居所と子ども部屋を兼ねて中庭と共に昭和 50 年頃に造られた新しい建物である。

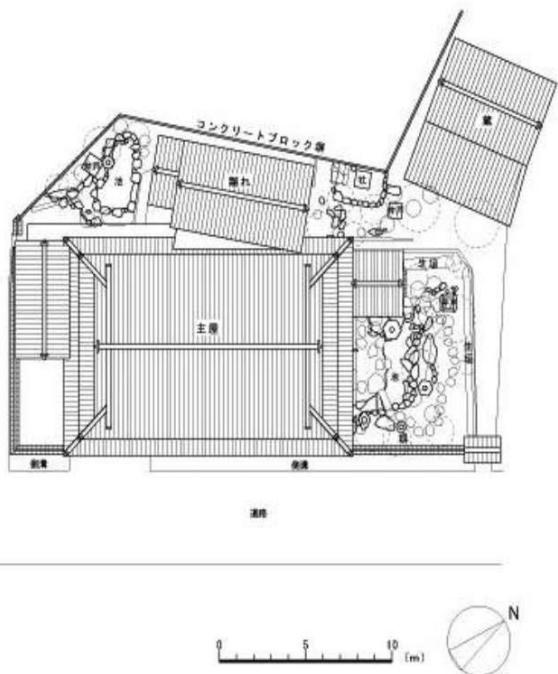


図 20 寺本家住宅配置図



図 21 主屋正面平側



図 22 主屋妻側真壁と貫



図 23 鉄製の持ち送り



図 24 主屋平側真壁と貫

### 3.2.2 主屋の外観意匠

寺本家住宅主屋の建築に関する文献資料は無く、現主から、家伝により四代前の主が昭和初期に建築したことが聞き取れた。農地改革までは地主であり、建築時は経済的にも裕福であったことが、主屋の造りや主屋と同時期の普請とされる蔵の存在からも窺える。

主屋は通りに沿い棟を並行に配した平入で、屋根は入母屋の桟瓦葺き、厨子二階建である（図25）。

間口は14.8mあり、平野家よりは規模がやや小さいが大型の町家である。

外壁は1階、2階共に真壁である。1階外壁は下部が板張りである。1階開口部は格子がはめられ、そのデザインは、細かな縦子の連子格子である。犬走りには駒寄が設けられている。戸口上部には表札より人目に付く、日蓮宗関連の木札が張り付けられている。

2階正面下手の開口部はガラス窓の構成である。外壁の中程には、水平材の貫が四周を廻るように取り付けられている。軒先には鉄製の持ち送りが付帯し、外壁の貫のラインと共に外観意匠上のアクセントになっている（図23）。

### 3.2.3 主屋の平面構成

主屋の平面構成は、通り土間の片側に居室が並ぶ形式である。通り土間は中戸と壁により、前土間と奥土間に二分されている。現在、前土間には応接セットが置かれ、応接間として用いられている（図26）。奥土間は竈（ヘツツイ）

が据えられた炊事場であったが、昭和50年頃に改造され、床上のダイニングキッチンになっている。さらに、昭和64年に下手に衛生空間を増築した。

床上部分の規模は大きく、棟下で前後に分化した前座敷型の整形六間取りの平面構成である。表側は接客・応対のための座敷空間で、背面は家族の私的空间である。

表側室には6畳、6畳、8畳（オク）の3室が続く。下手2室前には縁側が通りとの間に設けられ、比較的開放され

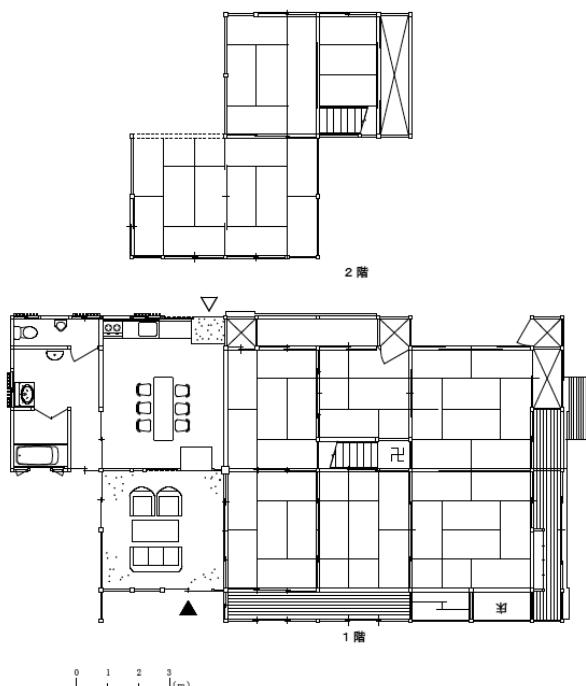


図26 寺本家住宅平面図

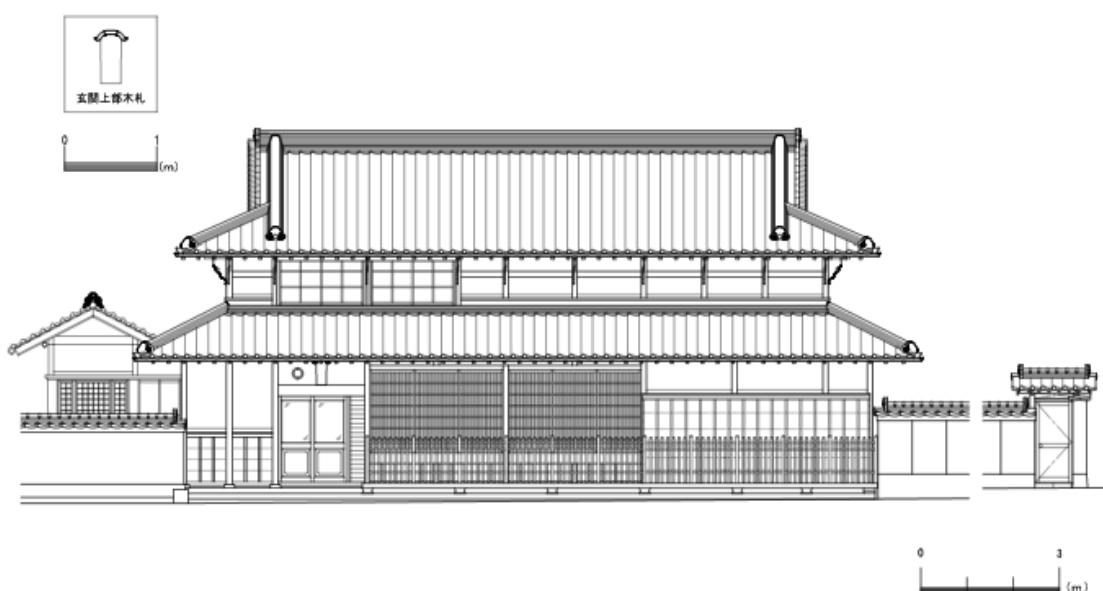


図25 寺本家住宅立面図

ている。主座敷のオクは格式的な造りで、床の間や違い棚が通り沿いに配置され閉鎖されている。一方、妻側には縁側が付き、主庭に面して開放されている(図 28-30)。また、便所舎には座敷縁側から板を渡して行き来するような造りになっている。

背面側には、6畳、4畳半、8畳の3室が配されている。下手6畳の間の土間境には一辺7寸の大黒柱が位置している(図 26)。

2階への階段は中央部屋境内に位置する。2階には通り沿いの前列に6畳2室、後列に6畳と3畳の2室、合計4室が配されている。前列室は通り沿いにガラス窓が付く。一方、1階表側上手2室には2階居室が設けられていない。

### 3.2.4 庭園

寺本家庭園は主屋の北側の主庭と離れの北側裏庭、離れた南側裏庭の3つに分かれる(図 20)。

#### 3.2.4.1 主庭

主庭は屋敷地の北東側に位置し、座敷に面している。設計者や施工者に関する資料や伝聞は無く不明である。



図 27 前土間と勝手口

池が庭園の中心に位置し、その池に沿って周遊できる飛石が配されている池泉回遊式庭園である(図 31)。池の入水や排水の設備がなく、また途中池底が園路を兼ねるため、もともと枯れ池であったと考えられる。

池の北側の護岸には大振りの石による石組が施され、その石を覆うようにサツキの大刈込が植栽されている(図 32)。池の南側は擬木による木杭護岸である。また、池底には氷紋敷のような石敷がされている。沓脱石と三番石は大振りの石が使用されており、三番石は石橋と接している。石橋の先は池の東から北側を池に沿って飛石が打たれており、北西側の井筒に続く。井筒は4枚の石で組んだもので、釣瓶腕木および屋根は擬木である(図 33)。また、井戸は埋められている。井筒からは石段で池に降り、園路を兼ねた池底を通ることで座敷前まで戻れる(図 34)。植栽はマキ、ツバキ、サツキ、イブキなどがみられる。

石造美術品は、座敷の縁先に自然石の手水鉢、池の北側に六角形石灯籠、東側に利休形石燈籠、南西側に雪見形石燈籠がある。飛石は白色の花崗岩が使用されている。紀州青石(緑泥方岩)による踏み石が庭園の要所に敷かれている。



図 28 前列室



図 29 前列の3室



図 30 主座敷



図31 主庭



図32 サツキの大刈込と石橋



図33 井筒



図 34 摺木の木杭による階段と池庭

### 3.2.4.2 離れ北側裏庭

付属屋の蔵と離れの間にあり、屋敷地の北西に位置し、屋敷神である社と景石、手水鉢で構成されている(図35)。蔵から離れ、勝手口へと通じる通路が通っている。

石垣により約76cm上げられた上に社がある。植栽はマキ、サツキ、クチナシ、キンモクセイなどがみられる。社のある石垣の東側に水道があり、その近くに自然石の手水鉢が据えられている。現在は荒れた状態になっているが、景石や花の咲く庭木や手水鉢などがあることから、当初は庭園空間として設けられていたと想えられる。



図35 離れ北側裏庭

#### 3.2.4.3 離れ南側裏庭

離れ南側裏園は池を中心とした池庭で、離れまたは勝手口へと続く通路から眺める庭であると考えられる(図36)。

主屋の台所から屋敷地外へと通じる勝手口までの空間で、井戸もある点から本来バッカヤードの位置であること、飛石と離れの開口部など池と建物の関係が合っていることから、少なくとも池周辺は離れを建て替えた際に造営されたと考えられる。池は現在、枯れ池であるが、井戸があり入水が可能のことや排水設備がある点から、かつては水が張られていた可能性もある。池底にはゴロタ石が敷かれ、



図 36 離れ南側裏庭

池護岸はコンクリート製で護岸上部には緑泥片岩(紀州青石)と思われる石が敷かれている。

植栽はマツ、マキ、サツキ、ヒイラギなどで、特にマキは屋敷地境界であるコンクリートブロック塀沿いにみられる。石造美術品は雪見形石灯籠が池の西側の護岸に設置されている。

#### 4 結

町並みには長屋門や蔵も残されているが、通りに主屋が面する町家が主に町並みを構成している。新しい形式や材料の家屋が多くみられるものの、木造家屋が大部分を占め、伝統的な町家も残されている。その中でも、棟瓦葺き屋根、平入り形式、厨子二階建で、2階外壁が真壁で中央に貫が通り、1階開口部に細かな縦子の連子格子が填まる町家M型家屋が数軒みられる。これらは、近代以降に普及した建築様式と考えられる。明治時代に普請された大型町家の影響を受け、類似した様式の町家が昭和初期頃まで普及していくと推測される。その後は2階の建ちが高い本二階屋が主体となり、次第に用いられなくなる。

平面は通り土間の片側に居室が並ぶ構成である。前に2室配されている中規模のものは、道路に面した開口部は格子で構成されている。3室並ぶ大規模のものは、下手2室は格子であるが、上手室は壁で構成されている。上手室は主座敷の構成で、床の間・違い棚等の座敷飾りが壁面に位置する。一方、妻側には縁側を介して庭園が設けられている。

庭園においては、まず、大阪や京都などに見られるような近代庭園を舞台とした茶や歌合などの遊興は確認できなかった。しかし、屋敷神などの社が配されるなど信仰の施設を取り入れ、庭園と生活の場との共存がみられる。また、擬木の使用は、モルタル製の擬石・擬木をふんだんに使用している琴ノ浦温山荘庭園(和歌山県海南市)を代表する近代庭園の特徴と共通している。それら近代庭園と同時期に当時の新しい造園資材や技術を取り入れ造営されたと考えられる。

今後、さらなる事例調査と検証が必要であるが、本調査研究により、西坂本の近代町家の特徴の一端が明らかとなり、また、庭園においては、住まいの場としてのみならず、信仰や生活文化との関連が捉えられた。

#### 謝辞

調査にご協力頂きました調査家屋の皆様に深くお礼申し上げます。岩出市教育委員会、並びに調査・資料作成にご協力を賜りました建築家の中島大介氏、中島康代氏、和歌山信愛女子短期大学助手の渡邊由理先生に謝意を表します。

#### 註

- 1) 西坂本は、昭和22年に町村制実施により根来寺の管轄区域となり、昭和31年の町村合併で大字根来に名称変更されたが、本稿では西坂本と表記する。
- 2) 西坂本の町並みの先駆的な調査研究として増野(2005)の論文がある。
- 3) 岩出市は、岩出市文化財活用地域活性化実行委員会を組織し、文化遺産を活用した地域活性化の推進事業の一環として、「岩出市文化遺産記録作成、調査研究事業」に取り組む。文化庁の「平成28年度文化芸術振興費補助金(文化遺産を活かした地域活性化事業)」助成を受託し、調査研究がなされた。
- 4) 庭園に関する拙稿として、堤涼子・千森督子(2017)がある。

#### 参考文献

- 岩出町誌編集委員会編(1976)『岩出町誌』pp.1181-1182  
栗野隆(2009)「擬石・擬木の造園的利用の系譜からみた琴ノ浦温山荘園の造園史的位置づけについて」ラン  
ドスケープ研究72巻5号 pp.439-442  
高市志友編(1812)『紀伊国名所図会』  
堤涼子・千森督子(2017)「民家の庭園からみた生活文化  
に関する研究 一和歌山県岩出市における民家調査  
事例から一」多摩美術研究第6号 pp.41-57  
増野真衣(2005)「根来寺門前町の町並みの構成」関西大  
学工学部建築学科建築史研究室 建01-117 pp.1-38  
町田香(2011)「近世庭園の遊び方 劇場と化す都市の庭  
園」、『都市歴史博覧 都市文化のなりたち・しくみ・  
たのしみ』笠間書院 pp.350-369  
和歌山県教育委員会編(2010)『和歌山県の近代和風建  
築』pp.71-72